

始



本久

特279
237

蒙賊記第二

蒙古使到高麗回事

新く文永三年八月兵部侍郎黑的とての者を正使とて禮部
 侍郎殷弘を副使とてまづ高麗をよきとて高麗回王元宗
 植ふ謂くめて白汝國と日本とは蒼海を隔つていふちかく隣
 國るれば我使と意内しては國よりいふは是れも海に西伝の禮儀
 儀人ぐたかひふ禮年より記命とてい入んとて導引せよとていませ
 ける高麗王お使と請くく曰王命の詔一形知りたる言ふ
 波日本海海の波は甚以て容易なるを海流はさかど遠くはれ
 風烈しく浪あらしき難處の患に計りて試み海より



下子をお見聞ありて其日の意接をさうぬれ酒食の登と
何れ何れと奔走したるを切とる藩子に彼趙尋ぐり
ぐく我皇玉に暇海して結貨成交易すりあはれねど西の方の
意高どの志をさうも取とさう洋中あり密く不交易とせ
うは高藩子ハ利益をゆく民の便りのさうかろぬれ海に我
荷擔してさうもさうけ一取とせぬとせんと思惟しつ
まづ彼使者の心とて使はる日數と送るはくそ幸もあれ
あくる年の正月おぬをさるお長宗君變を百わ一事の中を
中合めては使者に送る今未時時に起るめと海とをせめ
はくそとも藩子の使を以て的般弘を宗君變と事因者と

巨濟縣松邊浦よりあつて運ぶ大洋を又後世に風伯神叫
喊を震つて海若佛乱々怒を震つて海を風を生じ風浪を
巻く混々々々不偏に湧く高き浪を眼移の届く限
さうに津涯ぬるさうり雨使さうにあき果くは風濤のさうねを
舟楫のおおろふありけし有浪雲中をさうとて教を傳へし
すうかふる藩王宗君變の命を自ら傳へる副あり都下を
油か梅のさうさう海にたれ藩子とばおらもさう言ふさうあ使の
回道にさうさう使の志をさうさうさうさうさうさうさうさう
雨使さうぬれ人を怒ふれやと深く謝しなは使者のいさか
そ藩王に惟我さうさう打つて送るさうさうさうさうさうさう



おげくちあめく我思按のおよふをいとぬハ却て不忠なりと
朽らひ上の事なきを今ハいつて遠勅仕らん海濱の事小
功者なり起居舎人潘阜と中者小光守を侍らせ我書簡
をおくめ方おとらむも若くは日中と説諭せん其旨以
後若くは王の怒と解らん事ひつし小御子形おなりとそ
中なる殿上使に用ゑおれぬハ正使兵部侍郎黒副使
禮部侍郎殷弘と初めくくく藩の先遣使起居舎人潘阜也
若但る藩國合津波出帆して大洋海と押波て文永五年閏正月
荒業の浦よせせりたりと幸林もと少貳高所兼門尉三島賢
是とるく胆怪しく胆絶り早來士早波押出海岸を登る

色々の地類はあつてわつを侍る者々々那帝とやめ
先々おれをぬく事の子細は洋に波にまよるく回こむハ是
大なる古玉皇帝の使にあり我中兼くけむく好くと信せん
圖書と掲げく海濱せと府宰よりや海といつてそんを
若くは少貳三島賢をよめくく若くは使を長陸せめて
北回を命じしと古宰府をぞおまける正使副使皆上陸
古宰府をたり少貳三島賢を對面しつて向我君の御子の
皇皇帝を仁徳と仰ぎ龍弘量中て仁怒海くそ時方を尋る
東一ツとくく過つ半か華夏殷富りて唐氏業成實と
千里の行旅も一程の程と齎るるくく亂る事か

國之君境土相接尚務講信修睦况我祖宗
 受天明命奄一區夏遐方異域畏威懷德者
 不可悉數朕即位之初以高麗無辜之民久
 瘁鋒鏑即令罷兵還其疆域及其旄倪高麗
 君臣感戴來朝義雖君臣而歡若父子計王
 之君臣亦已知高麗朕之東藩也日本密通
 高麗開國以來示時通中國至於朕躬而無
 一乘之使以通和好尚恐王國知之未審故
 特遣使持書布告朕亦冀自今以往通問結
 好以相親睦且聖人以四海為家不相通好

豈一家之理哉以至用兵夫孰所好王其圖
 之不宣

至元三年八月日

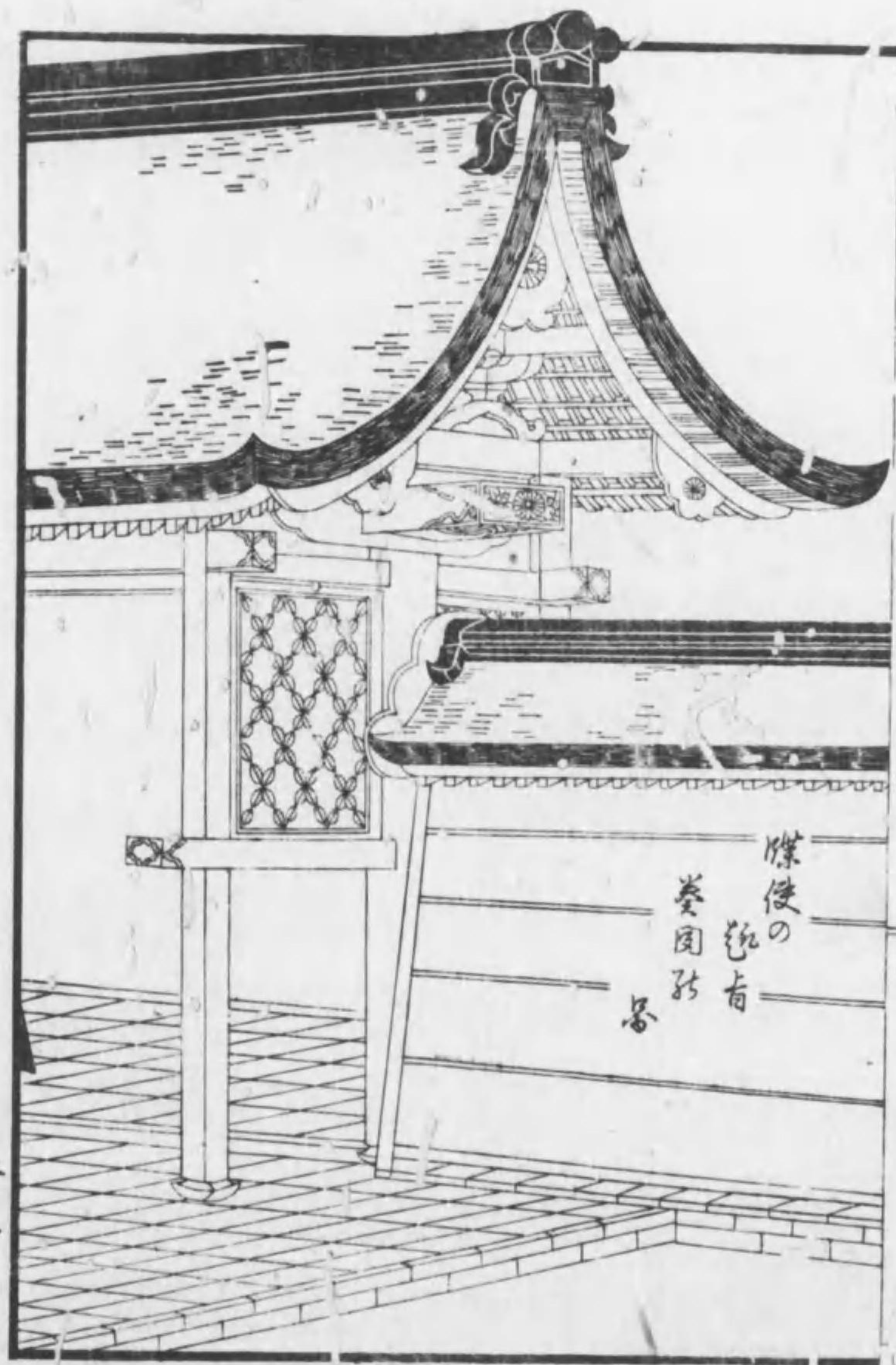
わくのどく書り多し高麗より海峽を我が國に
 通す王の下知を傳へては後やうすむに好むと徑りて
 今高麗王貴國に親しく好むを信じて鄰好の體成候へり
 せんし強を寡人不令に基肉とせしむる事再ふおひたり
 海峽の國をわが國に渡風の邪に絶てしむる事
 中候にきたれを張居潘阜を向候し高麗王の好む物を
 持しめりて好むなり王を固く首好と令り利徑を

はなつかりづつと使を三つしつゝ唯遠後の青國を好む事
無きと結んぐ五地の男は國々をこれ及ぶぬと云わぬ五地の
河原のなる重帝よりと喜ぶ作がらんぬはさふ事信とゆ
りてんて重帝よりと禮儀あり味界の女あつてん是れを
百さばつて使者とせりて奉節と名せりてさつてくやふ
病入つてし事いふあつてんを書りておぼしめし
又てたは情りなれの書経と名せりてさつてくやふ
派はつて事ありんつてたは事ありて敵慮を伺はるる事
めれりて月の禮儀ありて事ありて即日使者ありて書状と
おぼしめりてたは遣はるる事ありて大補時補の事あり

中巻をさしつけ

相模守申侍沙汰通事

後金の使者来りてつてたは波羅とて敵國小連ぬれば延漢
通つてつて一使より今度の使に客ありて一はつて延漢の
属國ありて使の小使たりてたはつて延漢の使に客ありて
りてたは延漢の長一國よりぬれば延漢の使に客ありて
おぼしめし禮儀と名せりて事ありて延漢の使に客ありて
正統の神別ありて外蕃とは比類をべりてたは延漢の使に
物とせりて使者と名せりて禮儀ありて義と名せりて延漢
小く半自らるる事ありて延漢の使に客ありて延漢の使



神代皇孫神明の靈諭とくけく三韓の國を平らげたまはるる後
外國に屯倉とく長く皇國小仕へなる處く空めむ日布の
大なるも宣ひむと今文丁宣ふありむいほは中
とへふ志とくひく交り結ひむら却く神をふす肯く
去して是と格んする何とつるやとらひあさん経世文章子
書つるく西返船を巻くくく一と菅原宰相長成船は小
勅令ありて西返書のおせ成りくめ給ひ書寺経朝は
神書のおるればく法書をもちきめむ取り西返船を
お集りめとて巻くく西返書とく徳倉は信ちる異見を
西返船ありあれば執持相換守時宗は旨と形とく勅書

たけくは廷議のいふく使書西國書箱の文新甚なりと
驕慢不遜の強くく云信因部のおるなり憎ら奴原のやりと
くくゆ来るんぞ死揚ふふおく少き彼若由神のそ卑とそせ印て
我をを乳をくく神心をせむるなりありも何事かを信人重記
かき西返書を巻くくく白皇國志を此神威を失くくさく
西返書は及くくくを奉りたる廷臣のつまも感歎して後原
武徳の棟梁おく賊後の逆威をゆるむる常より分列する
新くくハ云儀なりく法書とくお集りくとふ刺のあなり
たより西返書おるなりと筑紫とく追帰すくと勅諭ありければ
六史置りはを史將監時茂より右宰相少貳三所を門尉

新羅の使者に知らせしきく其の書詳らゆ志西通書ハ甚ハナレ
又之少ももたせしむる好法結入回親睦之なり又之少待言是
留世用の者と其表上留留すなりゆり中々もくく速に本國
せしむべしと申渡されたる

新羅使逗留の事

新羅の使黒的殷の事新羅の潘阜等々を宰府に
其書を指事申進言と侍たるに又小の油法なるは使者使
度く小及びけし下も帝都に経途一更の彼友も日好と任ぬ
だきの早くに行届し守衛の兵比差し侍候し數月後
おろしける或時使黒的潘阜と對し回高麗王の宣ひ

新羅の使者の會津梅茂にたるといへ増し事なりと申し
の一件汝然せしむる小譯をなは君命と辱しむるに定めて
罪科小行さるる一乃然地小多しつても禁國にも不入れぞ
西の地地小留め直對の禮をもとまらんは少くも家すり
たしむる書とえたりも彼李君用を説小ま守りて其禮の
書面あり石教の接接をいれりしついでせんといはれは潘阜
著しく回我言も國命は著しき道すの御を勤め違へ海方の
事つて費用をも進せしむるに候小かたは國をハヤも及ぶる
恙古玉も定めし強言し日ありんされは矛楯の始少く兵端は
つらむる必終の勢ひなり抑他國と兵と相ハ地利と博し事

なき虚偽をけりてされば今日日本あて密封の紙を程々
関ゆれどもむいほけりてはつり押しつけあ便をせりるを
宮を以て以て案内ひては是れも好例の約法法定して
より一多るげき事と幕府より道許と飾りて偽る
事おそれと幕府くちおとるより高麗王を以て法官と
石原の廣くするを存ねりて諸侯の事の中なる人等を
遣れぬやなれば按内すも好例と潘阜そんを以て
経ひのあふもそは役の昔と若副とをさるるより
知門下首事申恩位侍郎陳子厚より先等ひ
命しつ潘阜をも若活さるかか黒的殷弘等ハこの人

案内者として同三月に潘圃とお帆とをさるるを
けり蒙古王忽必烈ハその軍もいさむれば其國の勢も
見んもつるも小使者とすりて之も西征軍に合戦し及び
討たるも好例とおもひて定めたるよりを以て黒的等と發
せりて文官武官の法を定め軍儀を定めしりける先
海法とを案内して軍艦と警備とを率一の急務なりと
明威將軍都統領脱朵兒武德將軍統領王國昌武德將軍
副統領劉傑等命令して潘圃とを以て兵卒に人殺と點
檢せしめ出陣し及ぶ時と事か経と徑おとせしめ
我々の様を改めさせしめ海中なる黒山崎といふ日

朽わらるる新編よりより地理をも見たりと云
耽羅といふ島は倭小の島に属す新編より軍船而後と述べてあり
と云ふ合戦の用意とぞいへける

黒的の寫生捕對馬國人事

去年三月高麗國を出帆せし蒙古の使者黒的と初めしと云
高麗以此使申思合戦始めしと云其の使卒捕工等部合
七十餘人其使て文永六年三月七日對馬より着あり地理宗
右馬允澄玉早來(警急)の牛車以てして使と始めしと云
海軍は其を尋ねしと云黒的の首領を白を子統前玉右宰府
少く女武宗澄へ見せしと云我皇帝は國書の正史を與人給ふ

と云今度海軍は其より地理をも見たりと云
右馬允澄玉早來(警急)の牛車以てして使と始めしと云
其國より使つてしと云我日本を其時自らおんれ
つりて尊卑の差別といふ程よく考へしと云分界と定めしと云
よはあはれ神皇降臨のつりて天神をいふと云
神教ありしと云日本國の天皇を萬億載ふると云天皇の神孫
なりしと云地より皇緒と継ぐと云又大臣よりても天神より
の御流屬しては降臨すし海軍の時方より後裔をいふと云
さしに世に人種ありしと云神代の意規をとり今も其命
と云と云一様き加官つるを貴賤尊卑の等級と云



傳人怒て
争闘り
及び回

たぐひも系統一と論じてよむと弁ごり半やして彼法蓋外夷の
こゝく強弱をいふ優劣ははなれ別を論じ羸を存す其國成
強大なりと惣ふ玉辨と稱するも其を何ぞ強の事なりとも
官位の制限を設けてて其職階の中身はは位と踰えて取扱ふ
ことと許さば我も西偏の邑長たれも禁廷へ進奏するも
事なりけともなむば汝や外邦の善使朝廷へ参用せん事あるぞ
許さる理のあらんは問侍とて解しゆく正しき回報と知るも
るん強う西偏半代取つて半を是とするも先經回事を捧ぐ
らば一お問くも其善事より政府に傳へ將軍を討討するも
参事ありし小橋政大を初とてゆく廷議は及れりやとて文面の

無禮なりや言傳回りの傳言なり存おしく答めもふた答るれども
國を論じてふんはなれぬやなをさるるも一と論と許し強は
の幸ならずやけ理とも希いして再三西偏半代取ひ出ると
石徹の強懸しつゝ一若氣月夜ふ言強は強きと抗當を重ん
勢ひなむ何ぞ黒的等も存ん言ふや胸中には情さしつゝも事
とてい悪く多ぶとも強は強く其傷を愈新しくせん
たりして黒的等を強ふ言と強をあらむは強は強く強は
或は強をあらむといふ言も強を強む言なりおとびぬれど地
更ひくび五各始めふ言を強く強く強く強く強く強く強く
なりとありは強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く

宣めけしき老のく日もまぬれど白帝の清をくく救ふれ
 友人も年々くく新法も信はれしきも彼王城にむくて見れば石垣
 岩くく結ひぬくく横つくる宣子傳へは雨くくおぼえて
 了矢細戦ゆるきてあせりきてまをくく武備研文小書見しく
 宣年もまの威候とくして居並んがうさく小覚悟を宣めたる
 吾平所添二部ハくくびもてるあもぬくけけるまめく門とて此階を
 己くくく殿大くく道と出れが其王と名くけ人々曲解宣かぬ
 遊侍をあまの候くく文官武官くく見えたるハ堂上堂下小居候くく
 以て歳宮も新ひもまのさなりくくくくくくくくくくくくくくくく
 為さくくくあ清候とまんくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 王の旧海が幸回日かた

むくくく中華の親之朝親をもくくくくくくくくくくくくくくくく
 今朕が世ふるくく古例の後一奉朝の代せん事成をむくく
 心より候はれぬと百捕く難候せしむる不仁不義我の朕ハあは即位
 をなく候はれぬと治國を天下の一事ハの心緒と号く宣仁と
 せんく一度その度と又文に大しく仁候と布候くくくくくくくく
 故もくく一で軍食壺漿くく我軍をむくくくくくくくくくくくくく
 なく郡くくくく伏せざるハ金をくくく夏休平くけ今を宗をも
 亡がして四面修則と一統せん事且多しせん事くく宣愉快の事あり
 ぞや威とあ一寛大とあくくく皇國の朝廷を將軍守護
 地預各國の應候まぬの多寡浴海は清深をくくくく何んれ

終

